1920年代ペルー・クスコ地方における共産主義運動の形成

小 倉 英 敬

En la sierra andina se ha avanzado la filtración capitalista y el sistema latifundista se ha ampliado en rgan escala sacrificando a los campesinos indígenas de la comunidades indígenas y los pequeños agricultores independientes. En base de esta situación se han ocurrido muchos levantamientos indígenas y ha surgido los corrientes indigenistas en Cusco a fines del siglo 19 y se ha ampliado esta tendencia en los primeros años del siglo 20.

Del indigenismo cusqueño ha nacido el movimiento comunista en el Cusco. La cé
lula comunista tenía discrepancia con el movimiento aprista dirigido por Víctor Raúl Haya de la Torre y el movimiento socialista encabezado por José Carlos Mariátegui en la decada de 1920. Esta célula comunista cusqueño se ha integrado al Partido Comunista Peruano después de la muerte de Mariátegui bajo la dirigencia de Eudocio Ravines en mayo del 1930.

Este ejemplo del movimiento comunista cusqueño es una consecuencia ejemplar de la filtración capitalista en los países periféricos dentro de la sistema capitalista mundial.

1. はじめに

ペルーの山岳部南部地域においては，19世紀末から主に羊毛が国際市場に統合されたため，先住民共同体の共有地や独立農所有の農地が大土地所有層や商業資本家層によって簒奪され，その結果1910年代末から1920年代にかけて先住民農民の叛乱が続発した。その結果，先住民の権利を擁護するとともに彼らの社会的条件の改善を求めるインディヘニスモの思想と運動が発生した。

特に山岳部南部のクスコ地方においては，大土地所有の拡大という周辺部農村の社会構造の変化を背景として，知識人層の間にインディヘニスモの運動が成長し，主として中間層の急進的な社会運動に発展し，1920年代以降のペルーにおける大衆運動の二大潮流となるアプラ運動（APRA：Alianza Popular Revolucionaria Americana）と社会主義運動の基盤が形成され，1920年代末にこれらの運動が分岐していった。

クスコ地方においては，このようなアプラ運動を母体としつつ，他方でリマに発生した社会主義運動とはコミンテルン（共産主義インターナショナル）と異なる関係をもつことになる初期共産主義運動が形成されることになるが，本稿はクスコにおける初期共産主義運動の形成プロセスを，インディヘニスモを発生基盤として位置付けて跡づけることを目的とする。

なお，本稿の中でインディヘニスモという用語が多用されているが，インディヘニスモの定義は多様である。筆者は，先住民の擁護・復権を目指す社会的・政治的傾向や先住民が直面した社会的・経済的構造を問題視する傾向を「社会的インディヘニスモ」と定義し，1910年代から1940年代半ばまでに現れた文化的・創造的活動を「文化的インディヘニスモ」と定義して，双方をインディヘニスモと総称するが，本稿では前者を示すものとして取り扱う。

〈ペルー内外およびクスコ地方における社会運動略史〉

	クスコ地方の動向	ペルー内外の動向
1921 年		1 月，ゴンサレス・プラダ人民大学創設
1922 年	（先住民騒擾事件が多発）	5 月，殖産省内に「先住民擁護局」設立
1923 年	（先住民騒擾事件が多発）	3 月，マリアテギがヨーロッパから帰国 5 月 23 日，レギア政権の反動化→ 9 月，アヤ・デ・ラ・トーレ国外追放
1924 年	5 月 10 日，ゴンサレス・プラダ人民大学創設 5 月 19 日，『コスコ』誌第 1 号発行	5 月 8 日，メキシコでアプラ運動の前身体が始動
1925 年	5 月，「アンデ」グループ結成 12 月 30 日，『コスコ』最終号発行	
1926 年	11 月 26 日，「再生グループ」結成	9 月，リマで『アマウタ』誌創刊 11 月頃，アプラ・パリ支部結成
1927 年	5 月，国立クスコ大学学生スト実施 9 月，『クントゥル』誌創刊	1 月，アプラ・パリ支部に「反帝国主義研究センター」設立 2 月，ブリュッセルで反帝国主義会議開催
1928 年	6 月，クスコ・アプラ支部結成	1 月，ハヤ・デ・ラ・トーレが「メキシコ計画」作成 10 月 7 日，ペルー社会党（PSP）結成
1929 年	2 月 1 日，クスコ共産主義細胞結成 10 月 25 日，アレキパ共産主義グループあて書簡発出	5 月，ブエノス・アイレスでラテンアメリカ共産主義会議開催（コミンテルンと PSP が路線対立）
1930 年	3 月 20 日，クスコ県労働連盟創立 10 月，クスコ共産主義細胞が PCP に合同	4 月，マリアテギ死亡 5 月，ペルー共産党（PCP）成立 8 月 24 日，レギア政権崩壊
1931 年	5 月 20 日，繊維工場労働者争議に発したゼネスト実施	8 月 15 日，アヤ・デ・ラ・トーレ帰国

2. 大学変革運動

ペルーのアンデス山岳部南部においては，太平洋戦争（1879～83 年）直後より，羊毛生産の国際市場への統合を契機として，大土地所有が拡大するという大きな社会構造の変化と社会変動の結果として，先住民共同体を基盤とする先住民農民の反乱が頻繁に発生した。主な原因は，大土地所有の拡大が共同体共有地の簒奪を通じて行われたことと，大土地所有制の農場に対して近隣の先住民共同体の農民が強制労働を強いられたこと，さらに大土地所有の農場において小作農として労働していた先住民農民に対する過酷な収奪などに対する反発にあった。

先住民農民が集団化して抗議行動を起こし，これに対して大土地所有者側も対抗して武力衝突が生じたという事態の背景には，第一に太平洋戦争の末期にチリ軍が一部の山岳部地域に進出した際に農村部で先住民農民の間に抵抗主体が形成されたこと，第二に 1894～95 年に発生した支配階層であるシビリスモ内部に生じたカセレス派とピエロラ派の内戦が地方にも波及して，農村部にそれぞれの側に加担する武力集団が組織されるなど，先住民農民が武力集団化に慣れていたことが指摘される。このような武

力集団化（武力集団化と言っても武器の大半は銃器ではなく投石縄であったが）が，大土地所有制の拡大に抗議する運動として，先住民問題を先鋭化させた。

20 世紀初頭の先住民問題の先鋭化は，1909 年に首都リマにおいて先住民の復権を擁護する運動である「先住民擁護協会 Asociación Pro-Indígena」が，ペドロ・スーレン，ドラ・マエル，ホアキン・カペーロらによって結成されたことによって助長された。先住民擁護協会の目的は，先住民に対する法律面での擁護と大土地所有制の打倒を目指す政治的駆け引きを行うことにあった。先住民擁護協会は，1917 年に解散したが，1912 年から 1917 年まで月刊の機関誌である『先住民擁護の義務 El Derecho Pro-Indígena』を計 51 号まで発行した。

他方，山岳部南部のクスコ地方においては，先住民問題の先鋭化に対する認識と，一方で保守的な理念に基づいて運営されていた大学制度に対する批判が相俟って，1909 年 5 月に全国に先駆けて国立サン・アントニオ・アバ・デ・クスコ大学において改革運動が発生した。同大学は，アウグスト・レギア政権の対応措置を受け入れて改革派の米国人教授アルベルト・ギエセケを学長に任命するとともに，ルイス・E・バルカルセルやホセ・ガブリエル・コシオのような若手の改革派の研究者を教授陣に加えることになる。

これらの若手改革派の教授陣が組織した同大学学生連盟は，1910 年に雑誌『シエラ（山岳部）Sierra』第 1 号を発行し，先住民問題等の地域的な問題を取り上げるなど，国立クスコ大学が地域的な社会的問題を提起する拠点となっていった。同大学では，1920 年 3 月にペルー学生連盟（FEP）の第 1 回大会が開催され，労学連携を模索するゴンサレス・プラダ人民大学の設立が決定された。クスコにおいては 1924 年 5 月 10 日に職人協会の事務所にクスコ・ゴンサレス・プラダ人民大学が設置されるなど，クスコにペルーにおいても大衆運動の先駆けとなる先駆的な労学連携の基盤が形成された。クスコ人民大学の開会式ではバルカルセルが挨拶を行い，事務局長には労働者側からカシアノ・ラドー・アクリオが就任した。同大学では世界情勢やペルーの労働情勢に関する知識に加え，山岳部南部における先住民問題に関する労学間の共通認識の形成に力が入れられた。同大学は毎週月曜日から金曜日まで午後 7 時から 10 時まで行われ，労働者側の出席登録者数で約 100 名であった。

また，このような学生・知識人を中心とした労学連携の運動を支えた一般市民の間での先住民問題に対する関心の高まりを導いた要素として地方新聞の役割が存在する。バルカルセル，コシオ，ガルシア，アンヘル・ベガ・エンリケス，ルイス・フェリペ・アギラルクスコ大学の教授陣は，1917 年にホセ・アンヘル・エスカランテによって創刊された地方新聞『エル・コメルシオ・デル・クスコ El Comercio de Cusco』の国際政治，哲学・文学・文芸批評，歴史，先住民社会問題の欄を執筆するようになり，クスコ市民の社会意識の向上に大きく寄与するなど，クスコ地方において知的環境の変化を生じさせた(注 1)。

3. 1920 年代クスコ・インディヘニスモ運動

(1) 雑誌『コスコ』

前記のような，国立クスコ大学学生連盟やゴンサレス・プラダ人民大学の運動の延長線上で，1924 年 5 月 19 日に先住民問題に関心を示す知識人たちが参画した雑誌『コスコ Kosko』が発行され，翌 25 年 12 月 30 日までに 63 号が発効された。『コスコ』は 3 期に分類でき，第 1 期は 1924 年 5 月 19 日から同年 7 月 22 日までであり，ルイス・セベリアノ・ヤバル・パラシオス（1900～1931）が編集長であった時代で，ヤバル・パラシオスの思想的傾向である反レギア・反リマ姿勢が連邦主義に表現されて強く打ち出された時期である。

ヤバル・パラシオスは，1924 年 9 月 24～30 日にクスコ県内の 7 県において反レギア派によって実行

された同時武装蜂起計画の一環として，出身地であるパウカルタンボ郡内においてレギア政権に反抗する武装集団を組織して，一時的には郡都であったパウカルタンボ市およびほぼ全郡を襲撃して占領した。その後政府軍の弾圧を受け，1930 年 8 月にレギア政権が打倒されるまで指名手配を受けて逃亡を続けた。

『コスコ』誌の第 2 期は，同年 7 月 22 日から 1925 年 4 月 15 日までの時期であり，穏健派のルイス・フェリペ・パレデス・オバンド（1895～1984）を編集長として，事実上の『コスコ』誌の主催者である急進派のロベルト・ラ・トーレ・メディナ（1897～1949）が編集人として参加し，また執筆陣にはバルカルセル，ガルシア，ホセ・フリサンチョ・メセド，アンヘル・ベガ・エンリケス，ミゲル・アンヘル・ニエト，ラファエル・アギラル，アルフレド・ゴンサレス・ウィリス，フアン・メディナが参加した。1924 年 11 月 15 日に発行された第 21 号からは，ロベルト・バリオヌエボ・ナバロやハシント・パイバも執筆陣に加わった。この時期の『コスコ』は未だイデオロギー的には凝縮性は見られず，反レギア政権という共通性を有していたが，論調はパレデスに代表される穏健派的な傾向が主流であった。

1924 年 9 月 30 日に発行された第 16 号から『コスコ』の誌上には，クスコ県ウルバンバ郡，パウカルタンボ郡，シクアニ郡，アコマーヨ郡，チュンビビリカス郡や，アバンカイ県アバンカイ郡のようなクスコ市以外の山岳部内部の諸地方や，さらにはプーノ県やアレキパ県の執筆者も加わり，地方色がより鮮明に打ち出された。また，1925 年 1 月に発行された第 27 号からはペルー国内だけでなく，ボリビアやアルゼンチン等の南米諸国やメキシコに雑誌交換の対象地域が拡大された。

第 3 期は，1925 年 4 月から主催者であった急進派のラ・トーレが自ら編集長になった時期であり，同誌の傾向も急進化し，反レギア姿勢と左傾化を強めていった。ラ・トーレはジャーナリストでありまた同時に印刷会社を経営していたが，カシアーノ・ロドーとともにクスコの最初のマルクス主義者と言われる人物であった。ラ・トーレは，後述するクスコ共産主義細胞が設立される前に，リマのマリアテギらの社会主義者グループともコンタクトを有し，1925 年にはマリアテギが設立した出版会社であるミネルバ社のクスコ代理人を務めていた。ラ・トーレは『コスコ』誌の事実上の主催者であったが，同誌の第 2 期までは編集者には知識人を起用した。

『コスコ』誌の第 3 期において編集者であるラ・トーレの急進的な反レギア姿勢のため，ラ・トーレは 1926 年 1 月に身柄を拘束されて，カヤオ沖にあるサンロレンソ島の監獄に 3 か月間収監された。その結果，『コスコ』の発行は 1925 年 12 月 30 日に発行された第 30 号をもって終了する。しかし，『コスコ』誌がレギア政権の弾圧によって閉鎖されるまで 2 年間にわたって発行が継続された背景には，マルクス主義者であると名乗っていたにも拘らず，ラ・トーレは経営者としての才覚があったと言われる。『コスコ』誌の全掲載紙面の 27％はクスコ市および周辺の商業・製造業者の広告で占められ，掲載記事には資金援助と交換で提供した個別企業の訪問記事が掲載されるなど，運営資金の調達においてラ・トーレが示した創造性が寄与した(注 2)。

(2) 「エル・アンデ」グループと雑誌『プトゥト』

雑誌『コスコ』の次に登場した急進的青年の運動は，1925 年 5 月に設立された「エル・アンデ El Ande」グループであり，国立クスコ大学文学部の学生が中心となって結成された。その中心が，ロマン・サアベドラ，フリオ・G・グティエレス，オスカル・ロサス・テルシであり，さらにセルヒオ・カジェル，セサル・ゴンサレス・ウィリス，フリオ・モレノ，セサル・ビルチス等 20 数名が参加した。これらのうち大半がその後結成されたクスコ共産主義細胞に参加することになる。

「エル・アンデ」グループの活動は，政治的・社会的問題での活動は二次的なものとされ，主に文学・芸術的なテーマを取り上げて，活動形態は講演や討論会の開催が中心とされた。機関誌としてロマン・サアベドラが責任者となって『プトゥト Pututo』が，1925 年 5 月 1 日に発行された第 1 号から 11 月に発行された第 7 号まで計 7 号発行された。この雑誌は資金不足のために手書き原稿のまま発行された

ため，発行部数は少数に限られ，講演会場等で読み上げられるという形で普及された。このような発行面での制約にも拘らず，『プトゥト』は大学内に進歩的・前衛的な文学・芸術に対する関心を深める急進派の学生グループを結集する軸として機能した。

『プトゥト』は，1925 年 6 月 6 日の会合で書記長にオスカル・ロサスを選出するとともに，「エル・アンデ」グループの規約を採択した。規約は 6 月 15 日に発行された第 2 号に掲載されたが，その規約は「①“アンデ”グループは全会員の真の理想に向けた広範な文化普及と方向づけを目指す，②全会員の能力に最も一致した形態での真の教義や科学・芸術の普及を目指す」と記されていた。

同年 9 月に発行された第 5 号では，リマで同 9 月にホセ・カルロス・マリアテギ（1894～1930）によって企画された雑誌『アマウタ』の発刊に関する記事が掲載されており，『アマウタ』がクスコにおいても注目されていたことを示していた。また，同年 10 月に発行された第 6 号には，アヤ・デ・ラ・トーレが 1923 年 5 月 23 日の事件について言及した原稿「国民的な瞬間」や，パリに設立されていたラテンアメリカ学生協会に関する情報が掲載されていたなど，パリに居住するペルー人留学生や亡命者グループとの関係を推測させる記事も掲載されていた。

1927 年 5 月に発生した学長選挙をきっかけとした学生スト事件において反体制派の傾向を強めた「エル・アンデ」は学生ストの過程で会員を増加させ，同年 9 月にサアベドラを編集長として，オスカル・ロサス，セサル・ゴンサレス・ウィリス，ロサ・リベロ，グティエレス等「エル・アンデ」グループの会員が中心となって『クントゥル』誌を発行した。『クントゥル』誌は，こうして拡大「エル・アンデ」グループの機関誌であるとともに，アプラ・クスコ支部の準機関紙としての役割を有するものになる。

このように「エル・アンデ」グループは，当初は文学・芸術に関心を有する者たちの結集軸として結成されたが，結果的にはリマのマリアテギの動向や，クスコ出身の留学生たちも多数居住していたパリを中心としたヨーロッパを基盤とした急進派青年層の動向にも注目する傾向を示すようになり，その後アプラ・クスコ支部やクスコ共産主義細胞の結成に向けて先駆的運動としての役割を果たした。

(3)「再生グループ」

『コスコ』誌の廃刊や『プトゥト』誌の停刊（「エル・アンデ」グループはその後会員を増加させて 1930 年頃まで存続した）の後，登場したのが 1926 年 11 月 26 日に『コスコ』誌や『プトゥトゥ』誌の編集者や執筆者であったバルカルセル，ガルシア，パレデス，ラドー，ラ・トーレらによって結成された「再生グループ El Grupo Resurgimiento」である。書記長にはラドーが選出された。「再生グループ」は，第 1 期『コスコ』誌に執筆した穏健派インディヘニスモ系知識人と，第 2 期『コスコ』誌の中心的な執筆者となり，「エル・アンデ」グループにも参加した急進派・左傾化知識人を網羅したクスコ・インディヘニスモ全体を体現する運動となった。

「再生グループ」の結成には，その直前にクスコ県内のカンチス郡内で発生した先住民農民が所有した家畜の略奪を目的とした地方権力による先住民迫害事件とキスピカンチス郡ライラマルカ地区で発生した大土地所有者サンディバル家による賃金不払いに抗議した先住民労働者に対する弾圧事件が影響した［Valcárcel 1981:245］。その結果，1926 年 12 月 15 日に採択された「再生グループ」の規約第 1 条には「先住民を悲惨な状態に置かれた弟として物質的・道徳的に庇護する」と，また第 7 条には「文明社会の中でのあらゆる権利と生命の保証を実現する」と記されていた通り，その傾向は先住民擁護を目的とした温情主義的で，外部支援的なものであった。何故なら，会員は先住民ではなく，多くがクリオーヨやメスティソ（混血）出身であったためであると考えられる。しかし，その当時，先住民の擁護と復権を前面に掲げる運動は画期的なものであったことは否定できない。

1927 年 1 月に発行された『ボレティン』第 1 号には，「県内先住民が置かれた暴力的な状況」と題する報告が掲載され，県内のカンチス郡やキスピカンチス郡で発生した先住民に対する虐殺行為が報告され，地方権力者や大土地所有者が告発された。この『ボレティン』第 1 号に掲載された記事は，マリア

テギが編集長となってリマで発行されていた雑誌『アマウタ Amauta』に再録された，『アマウタ』を通じて，『再生グループ』の活動は全国的に知られるようになり，全国的なインディヘニスモ論争が発生する契機となった。

インディヘニスモ論争は，1926 年 12 月に『アマウタ』誌上に掲載されたエンリケ・ロペス・アルブハルの論稿「先住民の心理について」や，1927 年 1 月に発行された同誌に掲載されたバルカルセルの論稿「先住民問題」を発端として，マリアテギが 1927 年 1 月 21 日に発行された『ムンディアル Mundial』誌の第 345 号から 2 月 4 日に発行された第 347 号に「わが国文学におけるインディヘニスモ」と題する論稿を 3 回にわたって連載したことを直接のきっかけとなって始まった。マリアテギの論稿に対してクスコの『エル・コメルシオ・デ・クスコ』の編集長である保守派のホセ・アンヘル・エスカランテが同年 2 月 3 日付けの『ラ・プレンサ La Prensa』紙に「われわれ先住民は」と題する反論記事を掲げ，さらに後にペルーアプラ党（PAP）の幹部となるルイス・アルベルト・サンチェスもマリアテギを批判して参戦し，主にマリアテギとサンチェスの間の論争に発展した。インディヘニスモ論争は，同年 4 月に発行された『アマウタ』第 4 号に掲載されたマリアテギの論稿「有限の論争」によって終止符が打たれた。マリアテギの主要論点はインディヘニスモは人種間の対立を超えた国民統合を実現する文学以上の意味を有するものであり，時代的な意識を表現する傾向であると主張する点にあり，他方エスカランテはマリアテギの主張は非先住民の側からの発想であると批判，サンチェスはインディヘニスモは国民統合よりも国民分断をもたらすものであると批判した。

「再生グループ」の活動は，このように 1927 年に展開されたナショナル・アイデンティティにも関係する重要な全国的な論争となったインディヘニスモ論争に火をつけることになり，その意味で 1920 年代のペルーにおけるナショナル・アイデンティティに関する中心的な問題提起を行った運動であったと評価できる。

4. クスコ・アプラ支部の結成

(1) クスコにおける労働者層の形成

クスコ地方においては，19 世紀末から繊維（クスコ市内の綿織物工場であるワスカル工場やエストレージャ工場のほか，地方都市部のウルコス町，ルクレ町，マランガニ町には毛織物工場が存在し，繊維部門全体では 1920 年代半ばに 300～400 人の工場労働者が存在）や発電部門に企業が成立して労働者が発生し，その後 1920 年代初頭までに新聞・印刷，飲料（ビール生産）の諸部門で工場労働者が発生したほか，クスコ県内で開発された種々の鉱山には鉱山労働者が存在したし，鉄道が延長されてクスコが太平岸のモジェンドまで繋がれたこともあり，鉄道労働者も発生した。

1924 年当時のクスコ県の人口は約 40 万人，クスコ市の人口が 2 万 4000 人と推定されているが，労働者は職人層を含めて数千人程度であったと考えられる。因みに，1931 年 5 月に繊維企業であるワスカル・エストレージャ両工場の労働者がゼネストを行った際に，5 月 20 日に県内の労働者が連帯デモをクスコ市内で実施したが，その折にデモ隊の参加者数はクスコ市周辺の鉱山労働者も参加して約数千人であったと記録されており，1920 年代に労働者の組織率はかなり進んでいたと判断される。クスコ地方においては，1920 年代後半に労働運動は急速に組織化が進んだと見られる。そのことが，1930 年代以後にクスコ地方が左翼勢力の堅固な拠点であり続けたことの基盤をなすものとなったと考えられる。

このような発生期にあった労働者層が 1920 年代初頭に国立クスコ大学の学生たちとの連携を深めて，1924 年 5 月に設立されたゴンサレス・プラダ人民大学の労働者側の主体となり，さらに学生・知識人層とともにクスコ・アプラ支部やクスコ共産主義細胞の結成においてその基盤をなしていった。

(2)　アプラ運動の形成

他方，リマ市においても 1921 年 1 月 22 日に設立されたゴンサレス・プラダ人民大学運動を軸として労学連携の前衛的な運動が形成され，1927 年前後にはアプラ運動として具体化されるに至る。同人民大学設立の中心となったのはビクトル・ラウル・アヤ・デ・ラ・トーレ（1895～1979）である。アヤ・デ・ラ・トーレは，1895 年 2 月にラ・リベルタ県トルヒーヨ市に植民地時代の名家の子孫である大土地所有者の家庭に生まれた。トルヒーヨ大学文学部に学んだあと，1917 年に首都リマの国立サンマルコス大学法学部に進学し，1919 年 10 月にはペルー学生連盟議長に選出され，労学連携運動の中心となっていった。1919 年 7 月 4 日に発生したクーデターを経て 9 月 24 日にアウグスト・B. レギア（1863～1932）政権が発足した際，伯父が副大統領であったこともあり，レギア政権発足に協力したが，その後レギア政権の保守化に伴ってアヤ・デ・ラ・トーレが指導する労学連携運動とレギア政権の関係が決裂するに至り，アヤ・デ・ラ・トーレは反レギア姿勢を強めていった。

1921 年 1 月 22 日にはリマにおいてペルー学生連盟の指導下に労学連携を具体化するゴンサレス・プラダ人民大学が設立されたが，アヤ・デ・ラ・トーレは人民大学学長に就任し，名実ともに労学連携の要の役割を果たした。また同年 6 月にはゴンサレス・プラダ人民大学の機関紙的役割をもつ『クラリダ Claridad』誌を発行して急進的前衛世代である「新しい世代」による情宣活動の中心となった。アヤ・デ・ラ・トーレが急進化する一方で，レギア政権は 1923 年 5 月 23 日に保守主流派への妥協を図ることを目的として「キリストの心に捧げる」式典を挙行したが，これに対して労学連携運動が抗議行動を起こして死亡者 2 名を出す街頭騒擾事件に発展，その際レギア政権はゴンサレス・プラダ人民大学学長であったアヤ・デ・ラ・トーレを首謀者として指名手配した。アヤ・デ・ラ・トーレは 10 月上旬に逮捕され，国外追放処分に付された。

アヤ・デ・ラ・トーレは，1923 年 10 月 9 日に追放地となったパナマ（アルベルト・ルイス・ロドリゲス・パナマ学生連盟議長が出迎え），およびキューバ滞在を経て（10 月 31 日着，11 月 3 日にはホセ・マルティ人民大学設立式に出席），11 月 16 日に当時メキシコの公共教育相であったホセ・バスコンセロス・カルデロン（1882～1959）の招待によってメキシコに到着した。メキシコではバスコンセロスから文化普及・農村教育振興計画の作成プロジェクトへの参加を求められた。

1924 年 5 月，アヤ・デ・ラ・トーレはメキシコを出国し，6 月に米国で組織されたキリスト教系・無党派系学生のソ連訪問団の一員に加わり，リマ地方労働者連盟（FLOL）のリカルド・カセレス書記長が発行した信任状を携行して訪ソした（メキシコは同年 8 月 4 日にソ連を承認）。FLOL からは「ペルーの前衛の代表としてソ連の実情を調査し報告すること」が任務として課せられた。また，メキシコの雑誌『絵入りウニベルサル』から 10 年間の特派員契約も取得した。アヤ・デ・ラ・トーレ一行がソ連に到着した時，コミンテルン（共産主義インターナショナル）の第 5 回大会が開催されて，アヤ・デ・ラ・トーレたちはオブザーバーとして出席した。また，7 月 15 日に開催された青年共産主義者世界会議にも出席した。訪ソ中，アヤ・デ・ラ・トーレは肺結核の初期症状を呈したため，同年 9 月にソ連教育人民委員であるアナトリー・ルナチャルスキー（1875～1933）からロマン・ロラン宛の紹介状を取得してスイスに向けて出国した。

9 月 27 日，アヤ・デ・ラ・トーレはレニングラードを発してスイスに向かった。アヤ・デ・ラ・トーレは 1928 年 4 月に執筆した（出版は 1936 年）『反帝国主義とアプラ』の中で，「モスクワにおいて私が得た第一印象は，ロシアにおいて見られたインドアメリカに関してもたれていたほぼ完全な無知であった」と記し，ソ連に関して否定的な印象を述べているが，この著作はアヤ・デ・ラ・トーレが国際共産主義運動と決裂した後の時期に出版されている事実を考慮すべきであろう。逆に，アヤ・デ・ラ・トーレと 1925 年 1 月にイタリアのジェノバで会見したパルミロ・マキャベロ在ジェノバ・ペルー総領事とセサル・ファルコンは，アヤ・デ・ラ・トーレが熱烈なソ連礼賛とマルクス主義賛美を行っていたと

証言している。この点にも，アプラ運動による歴史的な捏造が見られる。即ち，国際共産主義運動と決別したアプラ運動は，アヤ・デ・ラ・トーレが訪ソ時からソ連や国際共産主義運動に失望していたとの，歴史的事実の修正を行ったと考えられる。

アヤ・デ・ラ・トーレがスイス滞在中にペルーで発生したサムエル・デ・アルカサル大佐のよる武装蜂起未遂事件に関連して，レギア政権がアヤ・デ・ラ・トーレがこの未遂に連座したとしてスイス検察庁に身柄拘束を依頼し，同国官憲が旅券等の携行品の押収を行うなどの弾圧を行った。このため，1925年1月にアヤ・デ・ラ・トーレはイタリアに脱出し，ミラノ，ベネチア，ナポリを歴訪した後，2月22日にパリに到着し，その後ロンドンにわたってロンドン・スクール・オブ・エコノミックスに入学した。

アヤ・デ・ラ・トーレのロンドン滞在中に，アプラ運動の実質的な形成に向けて重要な出来事が発生した。同年6月に米国がメキシコに対する内政干渉を行おうとする事件が発生し，6月29日にパリにおいてラテンアメリカ出身の知識人やスペイン人知識人の緊急抗議集会が催され，アヤ・デ・ラ・トーレもロンドンから駆けつけて集会に出席した(注3)。この集会は「反帝国主義」を訴える集会になったが，集会にはスペインのミゲル・ウナムノ（1864～1936），ホセ・オルテガ・イ・ガセット（1983～1955），メキシコのバスコンセロス，グアテマラのミゲル・アンヘル・アストゥリアス（1899～1974），ウルグアイのカルロス・キハーノ（1900～1984），アルゼンチンのマヌエル・ウガルテ（1875～1951）等が参加して発言した。この集会が，アヤ・デ・ラ・トーレが「反帝国主義」を掲げる統一戦線的な運動としてのアプラ運動を結成する上で重要な出来事となったものと思われる。アヤ・デ・ラ・トーレはこの集会において「ラテンアメリカの新しい反帝国主義世代代表」の名において，「我々の戦いは内外の敵に対して行われねばならない。帝国主義の重要な計画の一つは我々を分断することである。統一し，連邦化したラテンアメリカは，世界で最も強力な連邦の一つを形成し，ヤンキー帝国主義にとって脅威とみなされるだろう。（中略）自由を求めて戦うラテンアメリカ諸人民の唯一の道は，内外の敵に対して団結することである」と発言した［Haya de la Torre1977a : 76–79］。この時点で，アヤ・デ・ラ・トーレにはアプラ運動の思想的基盤が形成されていたと見ることができよう。

1927年1月22日，ニカラグアのサンディーノによって行われていた反帝国主義闘争に連帯する目的で，アヤ・デ・ラ・トーレはパリに居住するペルー人留学生たちとともに最初のアプラ運動の具体的実態となったアプラ・パリ支部の会合に参加加した。集会に参加したのは，フェリペ・コシオ・デル・ポマル（1889～1981），セサル・バジェホ（1892～1938），エウドシオ・ラビネス（1897～1971）等の他，ルイス・エドゥアルド・エンリケス，レバサ，（エドガルドとウィルフレッドの）ロサス兄弟，（ラファエルとアルフォンソの）ゴンサレス・ウィリス兄弟等のクスコ出身者であった。

その後，アプラ支部がペルー国内のクスコやリマの他，ブエノス・アイレス，メキシコ，ラ・パス，キューバの各地に設立されたが，メンバーの大半はペルー人亡命者や留学生たちであった。サンチェスはこの日の集会は，1926年後半に結成されていたアプラ・パリ支部に「アプラ反帝国主義研究センター」を設立することが目的であり，集会にはペルー人の他，中国国民党の代表（Sia Tin 中華民国国連代表），ハイチ，ニカラグア，ドミニカ共和国の代表が参加したと主張している［Sánchez 1980 : 155］。この集会のアプラ運動史上における意味合いがアプラ運動の形成時期に関する考察において重要となる。

アヤ・デ・ラ・トーレは，その直前の1926年11月に発行されたイギリスの『ザ・レイバー・マンスリー The Labour Monthly』に「アプラとは何か？」と題する論稿を掲載し，アプラ運動の綱領を発表した。この論稿の中でアヤ・デ・ラ・トーレはアプラ運動の綱領となる「最大限綱領」である5点を掲げた。この5点とは，

（イ）ヤンキー帝国主義に対する行動。

（ロ）ラテンアメリカの政治的統一。
（ハ）土地と産業の国有化（民族化）。
（ニ）パナマ運河の国際化。
（ホ）全世界の被抑圧人民・被抑圧階級との連帯。
であった。

このように1926年後半にアプラ運動の最初の核となるアプラ・パリ支部が結成され，1926年11月末にはアプラ運動の綱領が策定されてアプラ運動の実態が具体化されていった。

(3) 『クントゥル』誌とクスコ・アプラ支部の結成

アプラ・パリ支部にはクスコ出身の留学生が多く参加していたこともあり，クスコの青年グループに対する働きかけも積極的に行われたものと推定される。アプラ・パリ支部の成立時期については，種々の状況から判断して1926年10月末から11月上旬までの時期と判断されるが，パリ支部からクスコへの働きかけが，1927年2月に行われたと見られる情報が存在する。

「エル・アンデ」グループからアプラ・クスコ支部，クスコ共産主義細胞に参加したカジェルが，1930年1月1日にマリアテギに送った書簡の中で，「われわれの支部組織は1927年2月に発する」と述べている。この「支部」とはアプラ支部なのか共産主義細胞を指すのか明らかではないが，カジェルの立場からは一貫した流れとして語っているものと理解されるので，両者の支部の発端が1927年2月にあったと述べているものと考えられるため，この時期は実際にアプラ支部が結成された時期であるというよりは，結成に向けた動きが始動した時期であったと判断すべきであると考える。クスコ・アプラ支部が結成された時期に関しては，グティエレスが当時の議事録を所蔵していて，1928年6月8日に結成に向けた会合が行われたと記載されていることから，結成時期はこの時期であったことは確実である。

しかし，その時期は後にアプラ・クスコ支部となる基盤が形成され始めた時期であったと判断すべきであり，この時期には後にアプラ・クスコ支部を結成する青年たちは，まだ「エル・アンデ」グループとして活動していたものと思われる。「エル・アンデ」グループはアプラ・クスコ支部の結成以後も存続し続けて，1929年1月28日に結成されるクスコ共産主義細胞の重要な核となる。

カジェルが「支部組織が発した」と述べている1927年2月は，1月22日にパリ支部において「反帝国主義研究センター」の設立会合が行われた直後であり，一方クスコにおいては学生ストが開始される直前であった。同年5月24日に国立クスコ大学理事会において学長選挙が実施され，保守派の現役学長であるエウフラシオ・アルバレスに対して，進歩派はガルシアを立候補させたが，大学当局はアルバレスが勝利したと発表した。これに対して，学生側は選挙に不正があったと抗議して学生ストを開始したが，大学当局は大学を閉鎖し，閉鎖は1929年2月まで継続された。

この学生ストには，社会意識に目覚めた卒業生たちも連帯して，単なる保守的な大学当局に対する抗議である意味を越え，急進的青年層の社会変革を目指す運動の質を有するものに成長していった。この時期が，クスコにおいて急進的な青年層を中心とする運動が急激に成長した時期であり，その結果として，1928年6月にアプラ支部が，そして1929年1月末にアプラ支部から共産主義細胞が登場していった。1927年10月に雑誌『クントゥル Kuntur』が創刊されたが，その創刊号において編集長であったサアベドラは，「学生ストは，クスコにおける革命的精神が発酵しつつあった最も可視的な表われであった」と述べている。

学生スト運動を経て，「エル・アンデ」グループには新たにカルロス・バレル，ロサ・アウグスタ・リベロ，エステラ・ボンカンヘルらが加わった。そして，1927年8月に『クントゥル』発行準備委員会がサアベドラ，カジェル，セサル・ゴンサレス・ウィリス，オスカル・ロサス，グティレス，ロサ・アウグスタ・リベロによって組織され，同年10月に創刊された。編集長はサアベドラであり，編集委

員にはセサル・ゴンサレス・ウィリス，カジェル，フリオ・モレノ・アルバレス，アキレス・チャコン・アルマンサ，オスカル・ロサス，フリオ・エンリケ・トレス，コンセプシオン・リベロ（ロサ・アウグスタ・リベロの妹），カルロス・バレル・ポルトカレーリョ，コリナ・ラ・トーレ（ロベルト・ラ・トーレの妹），エステラ・ボガンヘルが参加し，装丁にはグティエレス，アルフォンソ・ゴンサレス・ガマラ，アグスティン・リベロ（リベロ姉妹の兄）が参加した。

『クントゥル』創刊号には，編集委員には加わっていないが，「再生グループ」や「エル・アンデ」グループに参加するバルカルセル，ガルシア，ラ・トーレ，フリオ・ルナ・パチェコ，アンテロ・ペラルタ，エンリケ・ガジェゴス，ホセ・フリサンチョらが協力して執筆した。

創刊号の編集後記において，編集長のサアベドラは，『クントゥル』の思想的姿勢に関して，「アンデスの人間たちの新しい世代は，（中略）未来の社会革命を準備する戦闘的な希求をもたらす。『クントゥル』はそのような闘争精神に，そのような緊張した神経の激しいうねりに応える」と記している［Gutiérrez 1986 : 40］。クスコにおいては，「エル・アンデ」グループから『クントゥル』に至る運動に参加した人々は，「1927 年世代」と呼ばれる。

『クントゥル』誌は創刊時点で，リマの『アマウタ』およびその編集長であるマリテアギとの書簡交換を行い，雑誌交換の提案を行ったが，その後マリアテギとのコンタクトは，後述の通り，クスコ側からのリマのグループに対する嫉妬や不信もあり，1930 年 1 月まで途絶えることになる。

「エル・アンデ」グループは，『クントゥル』誌を通じた情宣活動を開始するとともに，1927 年後半頃よりクスコ市内の低所得者層居住地区において組織化活動を開始した。それらの地区に設立された支部にはそれぞれ名称が付けられた。サンブラス地区には「トコ・カチ・アイユー」（「アイユー」は「共同体」の意）支部，サンタアナ地区には「カルメンカ・アイユー」支部，サンクリストバル地区には「カントゥ・パタ」支部，リマックパンパ・サントドミンゴ地区には「コリカンチャ」支部と，1929 年末までに計 12 支部が設立されていった。これらの支部組織は，その後いずれもクスコ共産主義細胞の下部組織に編成されることになる。これらの支部組織においては，労働者の階級意識形成や活動の組織化が重視され，市内ヌエバ・アルタ通りのセサル・ゴンサレス・ウィリス宅に共同図書館が設立された。

グティエレスに拠れば，1927 年 1 月にブエノス・アイレスで出版されたアヤ・デ・ラ・トーレの著作『ラテンアメリカの解放に向けて』が同年中にクスコに持ち込まれており，同書には，1926 年 11 月の発行された「ザ・レーバー・マンスリー」に掲載されたアプラ運動の「最大限綱領」である「アプラとは何か？」が転載されているため，同年中に「エル・アンデ」グループのメンバー等は，アプラ運動の基本的思想を承知していた。その当時に理解されていたアプラ運動とは，一国党ではなく，「ラテンアメリカの肉体的・知的労働者の統一戦線」という意味合いにおいてであった［Gutiérrez 前掲書 : 55］。

1928 年 6 月 8 日，市内マタラー通りにあったオスカル・ロサス宅においてクスコ・アプラ支部が結成され，書記長にはオスカル・ロサスが，国内・議事録担当書記にグティエレスが選出された［Gutiérrez 前掲書 : 57］。他にカジェル，セサル・ゴンサレス・ウィリス，アルフォンソ・ゴンサレス・ガマラ，フリオ・モレノ，アントニオ・カラスコ，アドルフォ・デルガド，ホセ・ルイス・ロドリゲス，アキレス・チャコン，ルイス・ヤノス，セルヒオ・ペラルタ，セサル・ビルチスらが参加した。クスコ支部は，ペルー人亡命者であるロムロ・メネセス，マリオ・ネルバル，セサル・メンドサらによって結成されていたラ・パス支部と緊密な関係を結び，同支部を通じてブエノス・アイレス支部やパリ支部と連絡をとるようになる。

この時期にクスコ支部が結成された理由として，クアドロスは国外追放されてラ・パスに滞在していたビルチスが同地からラ・パス支部の影響を受けてクスコに帰国したことにあったと指摘している［Cuadoros 1990 : 115］。しかし，このクスコ支部は，アヤ・デ・ラ・トーレらのアプラ運動の主流と思

想的近接性をもつグループではなく，独自の思想的方向性を有するグループであった。6 月 25 日の会合においては，他の支部とのいかなる形での合同をも否定する決定を行っている。このようにアプラ・クスコ支部は，全体のアプラ運動の中において独自の姿勢をとることになり，そのためクスコ支部は短命に終わり，1929 年 1 月 28 日には大半のメンバーがクスコ共産主義グループの結成に参加して，アプラ運動と決別することになる。

(4)　クスコ共産主義細胞の結成

1928 年 10 月，ブエノス・アイレス支部からアプラ諸支部あての文書が到着し，10 月 15 日の会合を経て，同 22 日に返書が作成された。9 月に作成されたブエノス・アイレス支部からの文書は，後述の通り，1928 年前半にマリアテギが「メキシコ計画」に反対して，アプラ運動は同盟であるべきか党であるべきかとの問いかけを行ったことに対する返答として，「反帝国主義闘争と社会主義理論」に基づく「ペルー一国党」の建設を提案したものであり，後に「ブエノス・アイレス・テーゼ」と呼ばれるものとなる文書であった。同文書は「社会主義理論」に基づくとしたものの，マリアテギらが同年 10 月 7 日に結成したペルー社会党（PSP：Partido Socialista Peruano）のあり方には反対していた。10 月 22 日の会合で作成された返書において，クスコ支部は「ブエノス・アイレス・テーゼ」に対して反対することを通知した。クスコ支部は，複数の諸階級からなり中間層が主導し，プロレタリア階級の能力を否定する一国党のあり方に反対を表明した。しかし，その一方で，マリアテギらが結成した PSP への合同についても反対していく。

こうしてアプラ運動は分裂し始め，1928 年 12 月 29 日にアプラ・パリ支部の一部は PSP 支部を結成し，1929 年 5 月 15 日にはパリ支部の解散を決定する(注4)。このようなアプラ運動の分裂が進行していく中で，クスコ支部が 1928 年 4 月 16 日にマリアテギが一国党である「ペルー民族主義解放党」の結成に反対してメキシコ支部宛てに送付した書簡について知っていたか否かは定かではないし，他方 1928 年 6 月にマリアテギが 1928 年 6 月にすべての革命的な諸グループに送ったとされる共同書簡がクスコ支部に到着していたか否かについても定かではない。しかし，マリアテギと交流のあったサアベドラらは，マリアテギが 1928 年 10 月に発行された『アマウタ』第 17 号において PSP の結成を知らせたことを承知していたものと推定される。かつて『プトゥト』には『アマウタ』誌の言及がなされていたにも拘らず，クスコ支部の議事録には一度も『アマウタ』誌の名称さえ言及されないという不可思議な事態が続いた。

このようにクスコ支部はアプラ運動のペルー一国党の結党に反対する一方で，マリアテギらの PSP にも同調しないという独自路線を益々強めていくことになり，1929 年 1 月 28 日にクスコ共産主義細胞を結成するに至る。ここには，明らかにマリアテギらのリマ社会主義者グループに対する反発が見受けられる。結成会合は，クスコ市内にあるゴンサレス・ガマラの義兄で資産家であるグスタフ・マングレスドルフの自宅で開催されたとの説と，ワイナカパ通りにあったカジェル宅で開催されたとの 2 説がある。

出席したメンバーに関して，ゴンサレス・ガマラはカジェル，サアベドラ，グティエレス，オスカル・ロサス，セサル・ゴンサレス・ウィリス，フリオ・モレノとゴンサレス・ガマラであったと証言している。他方，グティエレスは，会合は 2 月 1 日にカジェル宅で開催され，出席者はカジェル，サアベドラ，グティエレス，オスカル・ロサス，セサル・ゴンサレス・ウィリス，フリオ・モレノ，ゴンサレス・ガマラであったと証言している。他方，カジェルはワイナカパク通りにあったカリリョ宅で 11 名が参加したと述べている。ラファエル・トゥパヤチ，ホセ・アンヘル・アラゴン，エンリケ・トレスらが出席したとの説もある。いすれにせよ，結成に参加した複数の関係者においても会合の日付，開催場所，出席者に関して異なる情報が残されている。結成日時については，1 月 28 日か 2 月 1 日の 2 説があるが，1 月 28 日であった可能性が大であると判断される。

5. クスコ共産主義細胞とペルー共産党の関係

(1) マリアテギとペルー社会党（PSP）

マリアテギは，アプラ運動の創始者であるアヤ・デ・ラ・トーレが，1923 年 10 月にレギア政権に国外追放されて以後，リマにおいて労学連携の中心となって急進派青年の運動を指導した人物である。マリアテギは，1894 年 6 月に海岸部南部のモケグア県に生まれ，小学生時代からリマ市で成長した。名門マリアテギ家の私生児として生まれ，小学校時代に左脚に障害をもつようになったため，小学校を卒業できずに独学し十台の頃から『プレンサ』紙の配達で身を立て，その後才能を認められてジャーナリストとなり，1910 年代には気鋭の著作家・評論家として反抗的な文学者たちと交流し，他方ジャーナリストとして労働運動に立脚して社会主義への傾斜を強めた。1919 年 4 月に生じた 8 時間労働制を求める労働運動の指導者として頭角を現し，同年 9 月に登場したレギア政権と対立関係になったが，本家であるマリアテギ家がレギア大統領と親戚関係にあったことから（レギア大統領夫人の母方がマリアテギ家出身），同大統領の勧めに応じて政府の情宣アタシェとしてヨーロッパに渡航する道を選んだ。マリアテギは，1923 年 2 月までのヨーロッパ滞在の大半をイタリアで過ごし，イタリア滞在中にベネデット・クローチェ（1866～1952），ピエーロ・ゴベッティ（1901～1926）らと知り合ったほか，アントニオ・グラムシ（1891～1937），アマデオ・ボルディガ，セラッティ，フィリッポ・トゥラーティなどのイタリア社会党，およびこれから分離したイタリア共産党の指導者たちと交流し，1921 年 12 月頃にはジェノバでペルー人社会主義者グループを結成し，社会主義への傾斜を強めた。マリアテギがヨーロッパ滞在を通じて体得したマルクス主義は，ロシア・マルクス主義の影響以上に，グラムシ，ジェルジ・ルカーチ（1885～1971），カール・コルシュ（1886～1961）らに代表される「主意主義」と歴史的解釈を特徴とする 1920 年代のヨーロッパ・マルクス主義の影響を強く受けたものであった。

1923 年 3 月に帰国してからは，アヤ・デ・ラ・トーレらが結成した人民大学運動に協力し，同年 10 月のアヤ・デ・ラ・トーレの国外追放後は，人民大学を基軸とした労学連携運動に代表される急進的前衛世代の指導者となった。1926 年 9 月には急進的前衛世代の雑誌『アマウタ』を創刊し，統一戦線の核を形成しながらも「分極と集中」を目的とした活動を開始した。1927 年 6 月にはアヤ・デ・ラ・トーレのヨーロッパにおける活動を原因とするレギア政権による「共産主義者による政府打倒陰謀」を口実とした急進的前衛世代に対する弾圧の中で『アマウタ』紙は休刊に追い込まれるが，同年 12 月に再刊された際には，社会主義派の人々が執筆した論稿が増えるなど，「分極と集中」のプロセスを経て「社会主義の雑誌」との姿勢を明確にしていた。マリアテギは，1928 年 9 月発行された『アマウタ』第 17 号から 1929 年 6 月に発行された第 24 号まで「マルクス主義の防衛」と題する論稿を連載したほか，種々の雑誌に掲載した論稿を通じて，その「主意主義」を特徴とするマルクス主義の思想を展開した［小倉 2002：108–121］。

前述の通り，この時期にアヤ・デ・ラ・トーレはメキシコに帰着して，ペルーへの帰国を目指して「メキシコ計画」を推進中であった。マリアテギは，この「メキシコ計画」を 1928 年初頭に知ることになり，「メキシコ計画」に強く反対するマリアテギとアヤ・デ・ラ・トーレの関係は悪化し，両者の決裂に至る。同年 4 月 16 日付けでマリアテギはアプラ・メキシコ支部宛てに書簡を送り，その中で「昨日までその準備のために互いに一致していた歴史的な偉業を引き受けることに失格して誕生したペルー民族主義党には決して加盟しないことを緊急に宣言する義務を感じる」と記し，アヤ・デ・ラ・トーレらが結成を目指したＰＮＬ（民族主義解放党）への加盟を拒否して，中間層の指導下で結成される一国党はイタリア・ファッショ運動と同様のものになると批判し，アプラは一国党に改編されるべきではなく統一戦線としてとどまるべきであるとの見解を示した。

これに対してアヤ・デ・ラ・トーレは5月20日付けで返信を送り，「あなたが我々に反対していることを知っている。私は驚かない。しかし革命は我々が，土地を分配しつつ，帝国主義と闘いながら，社会主義に言及することなく行う」と喧嘩腰で述べ，アプラをイタリア・ファッショ運動と同一視するのは「ヨーロッパかぶれ」の主張である反論した。

こうして，アヤ・デ・ラ・トーレを決別したマリアテギは，1928年9月16日にPSPの結成を決定し，10月7日に正式に結成された。PSPは，労働者と農民を基盤とする大衆党であると規定され，PSPの綱領は次の9項目の諸原則に基づくものであると宣言された。

①現代経済の国際的性格。
②プロレタリア革命運動の国際的秩序。
③資本主義経済の矛盾の高まり。
④資本主義は帝国主義段階にある。
⑤ペルーの前資本主義的経済は，帝国主義的利害に従属し，大土地所有・教会封建勢力と結託しているブルジョア経済の下では，植民地封建制の障壁と残滓から自らを解放できない。
⑥先住民共同体の残存の中に農業問題の社会主義的解決の要素が見出される。
⑦社会主義だけが民主的で平等主義的な教育に問題を解決しうる。
⑧ブルジョア民主主義段階を経た後，革命はプロレタリア革命に転化する。プロレタリア等が社会主義秩序の組織化と防衛の任務を果たす。
⑨PSPはプロレタリアートの前衛であり，階級の理想実現のための闘いで指導的任務を担う政治勢力である。

PSPは，「この時期におけるマルクス主義的社会主義の実践は，マルクス・レーニン主義である。マルクス・レーニン主義は帝国主義・独占段階の革命方式である。PSPは闘争方法としてこれを採用する」とし，「都市，農村・鉱山の労働者大衆と先住民農民の利益と欲求は，われわれの政治闘争の中で表現され，これらの要求や原則を実現できる」，「PSPが闘うべき当面の要求は（中略）プロレタリアートと中間階級の意識的分子によって積極的に支持されねばならない」と規定し，さらに彼らが「社会主義の最終的勝利に導く道を見出す」と宣言した。このように，PSPにおいては「プロレタリア革命」との表現は用いられておらず，「社会主義革命は，資本主義によって抑圧されているすべての人民の共同行動で」あると表現されていた。

PSPが結成される2か月前の同年7月17日から9月1日に開催されたコミンテルン第6回大会において「労農党」の結成は明確に否定されていた。この情報はペルーには届いていなかったと推定されるが，さらに国際共産主義運動においては，同年2月に開催されたコミンテルン第9回執行委員会総会において，統一戦線戦術が放棄され，「社会民主主義主要打撃」論へと路線転換を開始し，また内部的にも同年4月に開催されたソ連共産党中央委員会＝中央統制委員会合同総会や，同7月に開催された同中央委員会総会においてスターリン派とブハーリン派の闘争が開始され，6月に機関紙『プラウダ』において「右翼的変更との闘争」開始が宣言され，1929年7月に開催されたコミンテルン執行委員会第10回総会でブハーリン派の失脚と左翼的転換が明確にされていった。これらの事実を考慮すると，PSPが左翼的展開を開始していたコミンテルンの路線と対立することになるのは確実な情勢にあった。

この路線対立は1929年6月1日～12日にブエノス・アイレスで開催された第1回ラテンアメリカ共産主義者会議において明確になった。コミンテルンからはウンベルト・ドロー，南米書記局からはコドビージャ，青年共産主義インターナショナルからはペテルス（本名不詳）が，PSPからはポルトカレーロとウーゴ・ペスセが出席した。PSPはこの会議に向けて，『ペルーに関する報告』，『階級的行動の前史と発展』，『反帝国主義視座』，『ラテンアメリカにおける人種の問題』の4文書を提出した（『ペルーに関する報告』のテキストは現存していないが，残りの3文書のテキストは現存）。コミンテルン代

表はこれらのPSPの報告を痛烈に批判した。批判された諸点は，(a) PSPがプロレタリア前衛党ではなく改良主義政党であり，「共産党」に改編すべきである，(b) 先住民自決を重視すべきである，(c) 小ブルジョア層の反帝国主義姿勢の精神的要素を過大評価すべきではない，との3点に集約される。特に，(a) のPSPの労農党としての「党」の形態が最大の問題とされ，以後PSPはコミンテルンから共産党への改編を強く迫られることになる［小倉 2002：128–146］。

このようなマリアテギやリマの社会主義者グループとコミンテルンの関係の中にあって，クスコ共産主義細胞は，1929年5月20日付けの書簡をコミンテルン南米書記局に送付して，PSPとは別にコミンテルンとの関係を確立した。同年5月20日の会合において，クスコ共産主義細胞は12項目からなる原則を決定しているが，この12項目原則のテキストは現存していない。サアベドラは，12項目原則の基本点は，①マリアテギの改良主義的な社会主義路線と闘うこと，②アプラと闘うこと，③ペルー共産党を結党すること，の3点に要約されると述べている［Cuadros 1990 : 143］(注5)。

(2)　クスコ共産主義細胞とマリアテギの関係

クスコ共産主義細胞は，前述の通り，『コスコ』や「エル・アンデ」グループのメンバーであるラ・トーレ，ラドー，サアベドラらがマリアテギとコンタクトを有していたが，上記のような路線の相違やコミンテルン南米書記局との関係などもあり，マリアテギやPSPと連絡をとろうとしなかった。クスコ共産主義細胞が，マリアテギおよびPSPに対して，特にマリアテギに対して冷淡な姿勢をとっていた背景としては，「再生グループ」のバルカルセルをマリアテギが評価して『アマウタ』誌上において再三にわたってバルカルセルが執筆した論稿が掲載されたことに対する不快感があったと指摘する向きもある。そのような見方をする研究者は，同じインディヘニスモの傾向を有しながらも，学術的な研究に徹するバルカルセルに対して「共産主義者」を名乗って社会変革に向けた実践的活動を進めていた彼らの批判が，バルカルセルを評価するマリアテギに対する不信感につながっていたと説明する［Tamayo 1980b : 49–53］。

この時期，クスコ共産主義細胞は，1929年10月19日の内部合意に基づいて，クスコ県内各地，アレキパ県，アバンカイ県，アヤクチョ県，さらにはラ・パスにオルガナイザーを派遣して共産党の建設準備を並行的に進めていた。アレキパ県にはクスコ共産主義細胞のアレキパ県委員会が結成され，ラ・パス地方委員会も組織されるなど，国境を越えて組織化を拡大していた。

しかし，1929年末にクスコ共産主義細胞のマリアテギらに対する姿勢に変化が生じたようであり，マリアテギとコンタクトをとることを決定することになる。グティエレスは，コミンテルン南米書記局書記長であったビクトリオ・コドビージャが，両者が合同することが望ましいとの判断からクスコ共産主義細胞に対してマリアテギらとコンタクトをとるように働きかけがあったと述べている［Gutiérrez 1986:156］。しかし，グティエレスは，コドビージャからどのような形で働きかけがあったかについては触れていない。他方，フリオ・エンリケ・トレスはマリアテギらとクスコ共産主義細胞との間の相違は「社会党」か「共産党」の名称の違いに過ぎなかったため，クスコ共産主義細胞としても両者は合同することは可能であると考えたと述べている［Cuadros 1990 : 150］。

いずれにせよ，クスコ共産主義細胞は書記長であったカジェルの名で1930年1月1日付けの書簡を作成し，その書簡をホルヘ・ナバロ・ミリクが直接リマに携行してマリアテギに手交した。その書簡の中でカジェルは，「支部組織は1927年2月に発し」，「1929年5月に南米書記局に属する共産主義細胞を結成した」と述べ，組織的には6つの下部組織を有し，メンバー総数は約100名であると記している。また，ペルーの政治的現状を知るために必要な情報の提供を求め，それら政治的現状に対してPSPが有している行動計画や革命的な戦術を教えるよう求め，さらにPSPとクスコ共産主義細胞との間に安全かつ恒常的な接触の仕方について返事を求めた。

ナバロ・ミリクが，マリアテギの返答を持ってクスコに帰還したのは同年1月末であった。2月8日

にナバロの報告を聞くための会合が開催された。まず，ナバロ・ミリクは，①マリアテギの病状がかなり進行しており，マリアテギはラビネスがパリから帰国するのも待っている状態であった，②マリアテギは労働者階級の革命党の名称は社会党であるべきとのそれまでの姿勢を繰り返し，「PSP 宣言」を提供されたことを報告した。会合においてナバロが行った報告は，特に党名に関するマリアテギの姿勢は会合で冷淡に受けとめられたようであり，出席したメンバーはクスコ共産主義細胞がコミンテルンに直接所属し続ける姿勢を堅持した。そして，マリアテギが提起した PSP への加盟の勧誘は，クスコにおいて労働連盟の結成が 3 月 20 日に向けて進められていたためにメンバーが多忙を極めていたという事情もあり，遅々として進まなかった。

2 月 23 日に細胞会議が持たれ，マリアテギからの書簡に対する返書の作成が議論されたが，新書記長となったロサス名でマリアテギに対して，PSP 加盟への提案については 3 月に返答するとの内容を記すことで合意したが，その席上でナバロ・ミリクはマリアテギにクスコを訪問するように招請するよう要請したが，招請は返書の中に含まれなかった。その次の週にカジェルの要請で再び会合が持たれたものの，PSP への加盟を議論する会合は 3 月 10 日まで延期された。3 月 1 日の会合でナバロ・ミリクはマリアテギのクスコ招請が行われなかった理由について説明を求め，これに対してロサスは，改めて招請を行うと回答した。PSP への加盟に関する議論はさらに 3 月 17 日に延期されたが，書記長のロサスが逮捕され，サンロレンソ島の監獄に送られたこともあり，PSP への加盟に関する議論は具体化されずに終わった(注 6)。

他方，リマにおいては，コミンテルンの姿勢が 1929 年 5 月に開催されたラテンアメリカ共産党会議の後，同年 7 月には第 10 回執行委員会総会が開催され，さらに左傾化したこと，また 1929 年 11 月末に官憲による家宅捜査が複数回行われたこともあり，マリアテギは孤立感を深める一方で，病状も悪化し続けた。その結果，1930 年 3 月にはペルーを脱出してブエノス・アイレスに移転することを決意した。このような時期，同年 2 月にラビネスがソ連から帰国した。3 月 1 日，PSP はラビネスを迎えて中央委員会会合を開催し，病状が悪化しているマリアテギに代わる新書記長にラビネスを選出した。3 月 4 日の会合では「PSP は階級党であり，他の階級の政治勢力や政治組織との融合を意味するあらゆる傾向を拒否する。綱領と行動の中でプロレタリアートの独立性を放棄する政治的日和見主義を非難する。（中略）PSP は，国内情勢の中で，現実が革命的な小ブルとの協定および同盟を課していることを認め，PSP がこれらの革命的な性格を有する同盟の一部をなすことはできるが，あらゆる場合において，プロレタリアートは批判，情宣，組織に関する自由を確保しなければならない」とする決議を採択した。

マリアテギの病状は 3 月末より急激に悪化し，4 月 9 日には一時的に回復したものの，4 月 11 日に再び悪化し，4 月 16 日に死亡した。マリアテギの死亡後，コミンテルン南米書記局より「ペルーの共産主義者の同志たちへ」と題する文書が到着した。この文書は，「プロレタリア党の結成に反対し，小ブルのヘゲモニーの下に様々な社会諸階級を結集する政治組織を結成するというアプラの混乱させるイデオロギーを前に，同盟者に対する労働者階級の政治的，組織的な独立とヘゲモニー必要性が益々理解され，共産党を結成する上での障害が排除された」との「好ましき状況」が生じているとして共産党の結成を働きかけた。この文書が，5 月 20 日に開催された PSP 中央委員会会合で討議に付され，PSP をペルー共産党（PCP：Partido Comunista Peruano）に改編するとの決議が多数決で採択され，初代書記長にはラビネスがとどまった。

マリアテギが死去した 4 月 16 日に，夕刊紙であった「エル・ソル」および「エル・コメルシオ・デル・クスコ」がマリアテギの死去を報じた。マリアテギの死去に際して，クスコの共産主義グループは最大限の敬意を表してその死を惜しんだ。共産主義細胞は直ちに会合を開き，クスコ県労働者総連盟が主催する追悼集会を開催することを決定した。追悼集会は 4 月 19 日に職人協会の本部建物において実施され，労働者等約 1000 名が参列した。集会ではクスコ共産主義細胞を代表してカジェルが追悼の辞

を述べたが，その間拍手によって挨拶は何回も中断された。その後，ラドーが壇上に登り，マリアテギの人生と業績に関する講演を行った。最後はクスコ県労働者総連盟のセルヒオ・ペラルタ議長が追悼の辞を述べていた。

このようなマリアテギの死に際して示されたクスコ共産主義細胞による哀悼の意の表明は，両者の間には強い連帯精神が存在していたことを示すものであり，クスコ共産主義細胞は，路線においてはマリアテギが残したPSPのあり方には賛同していなかったものの，マリアテギ個人に対する反発感情は存在していなかったように見受けられる。

(3)　クスコ共産主義グループとペルー共産党の合同

1930年5月11日，クスコ共産主義細胞の書記長であったロサスが，PSPのリカルド・マルティネス・デ・ラ・トーレ宛てに書簡を送ったが，その書簡においてPSPで生じた分裂について言及して，党内議論に関する資料を求めたが，その文書においてもクスコ共産主義細胞がコミンテルンに属する組織として国際的な綱領に沿った全国的な共産党の組織化に向けて活動していると述べていた［Cusdros 1990 : 152–153］。

同年8月24日にアレキパにおいてサンチェス・セロ中佐が武装蜂起して，その結果レギア政権が打倒された直後から，反レギア派の拠点となっていたクスコにおいては，労働者の街頭行動も多発し，合法的な大衆政党としての労働党（Partido Obrero）を結成しようとする動きも生じた。このような労働者層の間にコミンテルンのボリシェビキ化路線に抵触する傾向は生じていることを憂慮したPCP書記長のラビネスが，同年10月4日にＣＧＴＰ（ペルー労働者総連盟）幹部のマヌエル・セルパとともにボリビア経由でクスコに到着した。ラビネスらはクスコ共産主義細胞との会合において，レギア政権崩壊後の国内情勢や世界恐慌後の国際情勢に関して説明し，マリアテギ流の「社会党」から脱却して，コミンテルンの「階級対階級」という路線に沿ってPCPのボルシェヴィキ化を進める必要性ともにクスコ共産主義細胞のPCPへの統合を働きかけた。その結果，クスコ共産主義グループは，内部の会合においてラビネスの提案を協議した結果，PCPへの統合を受け入れ，クスコ共産主義細胞はPCPクスコ県委員会に改編された。

6. おわりに

山岳部南部のクスコ地方は，1980年代末に至るまでペルーにおける左翼運動の最大の基盤であり「赤いクスコ Cusco Rojo」と呼ばれていた。クスコ地方において左翼運動が強力であった理由は，県内に多数の先住民が居住していたことにあると言って過言ではない。本稿において示したように，クスコ地方に左翼運動が全国的にもリマと並んで1920年代半ばに形成された最大の要因として，19世紀末から羊毛生産の国際市場への統合によって山岳部南部において大土地所有が拡大し，さらにはこれらの大土地所有制の農場において周辺部の先住民共同体に属する農民が過酷な強制労働を強いられていたこと，およびそのような土地と労働力の収奪に反発して1910年代から1920年代にかけてクスコ県を中心として山岳部南部において先住民農民による騒擾事件が多発したことが挙げられる。

このような先住民農民の動向は国立クスコ大学の教員や学生を中心とした知識人層に大きな影響を与え，彼らの間からインディヘニスモと呼ばれる先住民を擁護し権利の回復を求める運動が発生した。このようなインディヘニスモに基づく社会的な動きは，クスコ地方においては知識人グループと，他方で実践的な活動を重視する学生，学生出身者，労働者から成るグループに分岐する形で，インディヘニスモの運動が体現されていった。本稿で扱ったクスコ共産主義グループは，インディヘニスモが知識人による温情主義的な運動にとどまらず，勃興しつつあった労働者を基盤とする共産主義運動（実質的には社会主義運動であったが）に連動し，左翼運動の一翼を形成するに至った例である。その結果，クスコ

地方には強力な左翼運動の基盤が形成され，そのような傾向はソ連・東欧社会主義圏の崩壊によって左翼運動が方向性を喪失する 1990 年代初頭の直前である 1980 年代末まで継続した。

本稿が扱ったクスコ共産主義グループの例は，周辺部資本主義社会において，左翼運動が労働者を基盤とする〈資本＝労働〉の関係性を原因とするだけではなく，資本主義システムの拡大によって生じた大土地所有制の拡大と，それにともなって生じた先住民農民の土地喪失や労働強制に見られるような，先住民にもたらされた苦難と精神的に連帯する運動として根付いてきた例を示すものである。

〈注〉

(1) 1910 年代後半からクスコでは『エル・コメルシオ・デル・クスコ』と『オイ Hoy』の地方紙 2 紙が発行されており，2 紙の発行部数は 800～900 部であった。その後，1920 年代初頭に『エル・ソル El Sol』が創刊された［Tamayo 1989 : 9］。

(2)『コスコ』は，1934 年に第 64 号から第 71 号までの計 7 号が，ロベルト・ラ・トーレの弟であるクリストバル・ラ・トーレを編集長として発行されたが，1924～25 年に発行された『コスコ』が持ったほどの社会的影響は持たなかったと評価されている［Tamayo 前掲書 : 62］。

(3) サンチェスは，この日の集会はアルゼンチンのホセ・インヘニエロスが死去したことに対する追悼集会であったと述べている［Sánchez 1978 : 47］。

(4) アプラ・パリ支部はその直後に，形式的には 5 月 15 日付けで，アプラ運動の主流であるアヤ・デ・ラ・トーレに同調するクスコ出身のルイス・エドゥアルド・エンリケスを書記長として再建される［Planas 1986 : 243–244］。

(5) 1930 年 1 月 1 日付けのカジェルからマリアテギに送られた書簡の中に，「われわれの支部組織は 1927 年 2 月に発した。1929 年 5 月にブエノス・アイレスに南米書記局があるコミンテルンに属する共産主義細胞を満場一致で設立した」と記述されていることから，コスコ共産主義細胞の結成は 12 項目原則が作成された 5 月 20 日であったとする見方も成立する。

(6) 1930 年 2 月 25 日にアプラ・パリ支部の書記長であったルイス・エドゥアルド・エンリケスが弟のセサルとともにボリビア経由でクスコに到着し，クスコ共産主義グループの書記長であったロサスと会合して，アヤ・デ・ラ・トーレの「秘密文書」を手交してアプラ運動への参加を求めたが，ロサスはこれを拒否した。しかし，この動きがクスコ官憲当局の知るところとなり，エンリケス兄弟とロサスが逮捕されサンロレンソ島の監獄に送られた［Cuadros 1990 : 151］。ルイス・エドゥアルド・エンリケスがクスコ共産主義細胞に手交したアヤ・デ・ラ・トーレの「秘密文書」は現在に至っても公開されていない［Gutiérrz 1986 : 137］。

〈参考文献〉

小倉英敬

2002　アンデスからの暁光：マリアテギ論集，現代企画室

2010「20 世紀初頭ペルーのおける“ヌエボ・インディオ”観」，神奈川大学人文学会『人文研究』第 172 号，1–28 頁

2011「1929 年代アプラ運動の形成について」，神奈川大学人文学会『人文研究』第 173 号（所収予定）

Cuadros Villena, Ferdinand

1990　La Vertiente Cusqueña del Comunismo Peruano, Lima,Editorial Horizonte

Deustua, José/José Luis Rénique

1984　Intelectuales, Indigenismo y Descentralismo en el Perú 1897-1931, Cusco, Centro de Estudios Rurales Andinos “Bartolomé de las Casas”

Enríquez, Luis Eduardo
1952 La Estafa Política Más Grande de América, Libros y Revistas S.A. -
Gutiérrez L.,Julio G.
1986 Así Nació el Cuzco Rojo; Contribución a Su Historia Política 1924-1934, Empresa Editora Humboldt
Haya de la Torre,Víctor Raúl
1977a Obras Completas I : Por la Emancipación de América Latina, Lima, Editorial Juan Mejía Baca,
1977b Obras Completas IV : El Antiimperialismo y el APRA, Lima, Editorial Juan Mejía Baca
Lynch, Nicolás
1978 La Polémica Indigenista y los Origenes del Comunismo en el Cusco, Lima, Pontífica Universidad Católica del Perú
Martínez de la Torre,Ricardo
1974 Apuntes para Una Interpretación Marxista de Historia Social del Perú I y II, Lima, Univ.Nacional de San Marcos
Planas, Pedro
1986 Los Origenes del APRA; El Joven Haya, Lima,Okura Editores S.A.
Ravines, Eudocio
1977 La Gran Estafa, Buenos Aires, Editorial Francisco de Aguirre S.A.（11a edición）
Rouillón D.,Guillermo
1975 La Creación Heróica de José Carlos Mariátegui Tomo I, Lima, Editorial Arica
1984 La Creación Heróica de José Carlos Mariátegui Tomo II, Lima, Editorial ALFA
Sánchez, Luis Alberto
1978 Apuntes para Una Biografía del APRA Tomo I, Lima, Mosca Azul Editores
1979a Apuntes para Una Biografía del APRA Tomo II,lima, Mosca Azul Editores
1979b Haya de la Torre o el Político, Lima, Editora Atlántida（2da.edición）
1980 Haya de la Torre y el APRA, Lima, Editorial Universo S.A.,（2da edición）
Tamayo Herrera, José
1980a Historia del Indigenismo Cuzqueño Siglos XVI-XX, Lima, Instituto Nacional de Cultura
1980b "Mariátegui y la Intelligentsia del Sur Andino", Allpanchis No.16, Cusco
1981 Historia Social del Cuzco Republicano, Lima, Editorial Universo S.A.（2da Edición）
1989 El Cusco del Oncenio; Un Ensayo de Historia Regional a Través de la Fuente de la Revista "KOSKO", Lima, Universidad de Lima
Valcárcel, Luis E.
1981 Memorias, Lima, Instituto de Estuduos Peruanos